

ボランティアニュース

No. 12
2009. 3. 25

北大博物館の再発見資料紹介

「大本營」と「行在所」門標

未公開資料の整備中に、収蔵庫の隅に埋もれていた二枚の板看板が再発見された。一枚は「行在所」(45 x 170 x 7 センチ)、もう一枚は「大本營」(45 x 170 x 7 センチ)と墨書されたぶ厚い一枚板作りで、古びているが筆勢にも気迫がこもった堂々たるものである。

なぜ、北大の博物館にこんな不思議なものが保存されているのか、謎を探ってみた。

北大構内で天皇の宿泊所「行在所」と総大将の本陣「大本營」を示す門標が、同時に掲げられる機会としては、近代の歴史上、昭和11年(1936年)秋の北海道陸軍特別大演習の本拠地となった北大の例である。

なぜ、この時期の軍事演習なのか。大東亜戦争開戦前夜、満州事変(昭和6年)後の戦火拡大に伴う国威高揚の国家イベントであり、北海道の地は国防上、中国、ソ連から本土を防衛するための盾と見なされていたからであった。そして、この時期、昭和天皇は陸海軍の統帥権に護られた大元帥を兼ねた「現人神(あらひとがみ)」であった。その神様が、大元帥として演習統監のため北海道へ行幸されたのである。

当時、凶作続きで不況にあえぐ道内の行幸先で、急ぎよ道路補修や庁舎建築等、土木建設事業が国家の命で実施され、一時的に不況を吹き飛ばす大演習景気にわき立った。軍艦「比叡」で9月26日、室蘭に入港。御召列車で道東各地を巡幸後、札幌入りした当時の様子は、『大元帥陛下には慈光燦然と降り注ぐ1日午後4時13分、20万市民の熱狂的奉迎裡に陸軍大演習大本營たる北門の首都札幌市に着御あらせられた。過る幾句ひたすらに奉迎の誠をつくして御準備申上げたその晴れの日である！』(「北海タイムス」

図書ボランティア 久末 進一

昭和11年10月1日付記事)等からもしのばれる。

翌10月2日から5日まで札幌近郊石狩平野を想定戦場とし、悪天候の中、展開された北軍(旭川第七師団)と南軍(弘前第八師団)の遭遇戦を統監した大元帥の本陣に設定されたのが、北大構内の農学部新校舎だったのである。「大本營」門標はこの期間に掲げられ、演習終了と共に大元帥から天皇に戻った10月6日以後に「行在所」門標に掛け替えられた。

だが丁度、最終の演習地として予定されていた野幌付近に天皇が出御されるはずだった最終日の前日、北海道に台風が来襲し、札幌でも街路樹がなぎ倒されるほどの風雨となり、天皇一行の行幸は中止になった。この時の台風の風倒木活用のためイトムカ川の上流地に飯場が設けられ、丸太の馬曳き路による搬出が行われたが、この時、道路工事中に水銀鉱石が発見されたことから、後日、イトムカ水銀鉱山が発見されることとなった。

その後、演習ではない一発の銃声が北京郊外、盧溝橋に響いたのはまさに翌12年のこと。日中戦争の泥沼から、やがて学徒出陣の北大生たちの若き命が消えていく。その悲鳴にも聞こえる「大本營発表！」と共に、真珠湾攻撃による太平洋戦争が12月8日に開戦した。今年、平成21年7月に天皇は、その真珠湾に慰霊の旅に向かうという。



※ ^{あんざいしょ} 行在所とは天皇行幸の際の仮のすまい。行宮。行在。(広辞苑第六版)

各分野の活動紹介コーナー

皆さんが活動している様子を各分野(博物館ホームページ等から)のボランティアさんから紹介してもらったコーナーです。投稿を歓迎します。

- ・植物資料に関する収蔵管理と標本作製
- ・考古学資料の整理・記録・データ化・報告書作成
- ・昆虫標本作製と整理
- ・地学標本(岩石/鉱物/鉱石)の分類整理とデータベース作成
- ・博物館の展示パソコンおよびデジタルコンテンツ作成
- ・化石標本の整理・クリーニング作業
- ・北大の歴史展示に関する作業
- ・展示解説
- ・リーフレット翻訳
- ・平成遠友夜学校
- ・4Dシアター運営
- ・チェンバロ展示の充実
- ・図書の整理

博物館と私

私は60歳を過ぎてから、森や野を歩き自然を観察するという「野の花の会」を知り植物に親しむようになりました。年齢に差はあっても野の花を観察するという同じ目的の仲間に出会って、思いがけず老後の楽しみを見つけました。

そしていつの間にか、毎週火曜日は気の合った仲間と夏はフィールドで植物を観察し、シーズンが終わると北大の博物館で標本の整理をさせていただくという生活になっていました。

北大の博物館では最初に故原松次先生の標本整理から始まったと思います。

これはグループの仲間達が原先生と一緒に野を歩いたご縁によるものです。

中には虫に食べられ形がなくなったものやカビが生えたものなどもあり、それなりの苦労がありました。能力のある人はパソコンに入力し、それぞれ分業で作業をしました。

今、私は80歳を過ぎています。グループの仲間の中で私だけ年齢が離れていますが、仲間がそれを受け入れてくれているので、特別気にすることもなく大き

植物ボランティア 黒田 シズ

な顔をしています。実際は他の人より仕事が遅いのですが、それでも植物標本の整理に携わることにより、私なりの興味を持ってやっています。

最近整理している標本の中に、1890年代の古いのがあって、それが明治20年代のものだと気がついたとき、不思議な感動を覚えました。採集者の名前の中には高名な先生の名前も見られます。今は外国になっている千島やサハリンの昔の植物標本、そして高橋英樹先生が採集された千島やサハリンの新しい標本等々。百年の歴史がそこに流れています。そういうものに触れられる喜びを感じ、時には図鑑を調べたり仲間とおしゃべりをしたりして、私たちのグループは楽しみながら博物館に通っています



イタリアンチェンバロでイタリアンバロックを！No.2 ～初期バロックの巨匠フレスコバルディを聴く～

2月15日(日)17:30から知の交流コーナーに展示されている台風で倒れた北大のポプラから作ったチェンバロを使った演奏会が開かれました。この演奏会は「4Dシアター運営・チェンバロ展示の充実グループ」によるもので、今回は外部の演奏家も交えた本格的なものでした。メールの呼びかけに答えてセッティングと後かたづけだけのつもりで参加しました。クラシックは苦手。演奏会には年に1回いくかどうかと言う私ですから、初めてきちんとした？イタリアンチェンバロ・

イタリアンバロックの演奏を聞きました。10名ほどの演奏家、音楽家が日頃の成果を披露され、感銘を受けました。

チェンバロは



ただ展示しておくだけでは“腐ってしまう”のでボランティアの方々の協力で“息を吹き込んでいる”ことも知りました。長生きさせるには日々の努力が必要なのです。

当初30名ほどの参加を見込んでいましたが、50名

近く参加していました。

ボランティアお世話役の久住さんは、これからも演奏会を企画していきたいと話していましたので、休日のひととき、チェンバロ演奏を楽しんでみませんか。(永山)

子供セミナー「黒曜岩(石)石器を作りますか」開催報告

前号で鳥取大学名誉教授の吉谷コレクションが本博物館に移譲の経緯について詳しく報告がありました。実は膨大なコレクションの中から御寄贈頂く黒曜岩(石)を選別作業三日目の早朝、恐る恐る「子供たちと黒曜岩(石)を使って古代人の様に石器造りをしたので低価値の物でよいから頂戴できないか」と厚かましいお願いをしたところ、二つ返事で快諾され大量の黒曜岩(石)を博物館寄贈分とは別に頂戴する事が出来ました。セミナー開催まで資料室に眠らせるより展示したほうが良いとの意見もあり、整理番号を添付の上博物館アインシュタインドーム3階の回廊に破壊前の姿を、08年の年末に展示する事が出来ました。(現在も展示中)

その後パラタクソミスト養成講座で一部使用しましたが、今回未展示品も利用して親と子のセミナーを開く事が出来ました。

講師は、博物館考古部門の天野教授、岩石鉱物部門の松枝教授、埋蔵文化財調査室の高倉助教の御三方と、超豪華なメンバーを御迎えして行ないました。

1. 人類が道具を使うようになった時代考察
2. 黒曜岩(石)とは何ぞや(ハリーポッターの石を例にして)
3. 石器はどの様にして作られたか?(実物に触れながら)
4. アインシュタインドーム回廊の展示品の見学。顕

微鏡による岩石の組成状況の学習等、本格的な内容で午前の部を終了しました。

午後からは、ゴーグル、手袋等で完全武装し高倉先生の現地指導を受けながら、実際に黒曜岩(石)を割って石器づくりに挑戦しましたが、最初は悪戦苦闘の様子で黒曜岩(石)が割れずに、ハンマー用に用意した円礫の方を割るなど予想外の出来事に驚愕しましたが、慣れてくると「パカッ パカッ」と小気味良い音と共に荒削りの石片が出現するようになりました。時間が許せばサンプルに供した鍬や、皮ハギに近い物位は出来そうな雰囲気でした。自分で作った作品で肉や魚を切り、鍋物に使う材料造りをおこないました。鍋物が煮えるのを待つ間、道東の遺跡から出土した古代人が使用した石皿と石斧を使って、堅い殻を纏った「クルマ」を割って果肉を取り出すことを実習しました。これまた手を叩くのではないかと「ハラハラ」して見守っておりましたが「案ずるより生むが易し」の例えのとおりA5判の「ビニール袋一杯にする迄止めない」とばかり石斧を独占する剛の者まで出てきました。

最後に鍋に舌づつみを打ち、大鍋二杯が瞬く間に空になる健啖ぶりを見せてくれました。自分で作った黒曜石の破片や、お土産用に用意した白滝町赤石山8号沢産の黒曜石の破片を携えたところでセミナーを終了しました。(寺西)

ボランティアによる館外活動・他博物館の紹介コーナー

【第1回 博物館におしかけよう「小樽市総合博物館」】

2009年1月17日(土)14時 現地集合・現地解散

小樽市総合博物館

企画展「お菓子と木型?和菓子職人の小道具?」開催中

館の経営を助けるためにも「入館料は払う(無料見学は申請しない)」方針です。20名以上集まると団体割引(2割引)扱いになります。企画展を担当した佐々木さんが博物館の展示案内をしてくれます。

冬場、博物館の閑散期を盛り上げるために、道内の博物館におしかけたいと思います。道内のいろいろな博物館を見学して、博物館の展示方法を学び、館同士の交流を持ちたいと思います。皆さんフルってご参加ください。という大原先生の呼びかけで、小樽市総合博物館に総勢16名で押しかけました。



小樽市総合博物館は昨年リニューアル、本館と運河館があります。団体扱いにはなりませんでしたが、本館

の見学に16名が参加しました。

企画者の佐々木さんから北海道第一の商都だった小樽の歴史を彷彿とさせる和菓子の木型について解説していただきました。この木型は90年以上も続いていた和菓子屋さんが廃業したとき寄贈されたものだそうです。年取りの夜の鯛や海老の落雁の型、結婚式の式出物の1尺もある鯛の型。饅頭の焼き印やお祝いの菊の型など懐かしいものばかり。ボランティア仲間の田中さんや大矢さんの作った和菓子の見本もありました。これらの木型は職人さんがいなくなってもう作ることができない貴重なものばかり。最中の皮は専門に作る工場があって、お店の注文に合わせて、作っていたとか。あつという間に50数年前にタイムスリップしたひとときでした。見学後は小樽バインで出来たて地ビールを味わいながらの交流会。次回は何処に行こうか、楽しみだねと言いながら解散しました。(永山)

2008.12月~2009.2月までの活動報告

2008.12.13 開拓記念の村 ボランティアとの交流&忘年会

ボランティアの会の会長、前会長さんと活動の苦労や楽しみ、悩みを交流しました。春にはみんなで見学に行くことを約束しました。

2009.1.16 セイウチ化石(講師・田中 嘉寛さん)

現在世界にセイウチは1種しかいませんが、化石は22種見つっています。今生きているセイウチは特殊な種であることが知られていますが、当別から産出した新しい化石“当別セイウチ”がどこから来たのか、どのような地層で発見され、22種の中でどの位置にある化石なのか、修論の練習第一号として話してくれました。地質や化石に詳しい先輩から貴重なアドバイスもありました。

2009.2.13 「氏か育ちか」から「氏も育ちも」へーエゾサンショウウオに学ぶしなやかな生き方(講師・若原正己さん)

爬虫類の雌雄決定は卵の温度というのは良く知られていますが、両生類でも温度で決定することが実験で確認されたそう。夏になり、室温が高くなると雄が“消えて”しまうことに疑問をもち、もしかして雌雄決定に温度が関係しているかもと実験を重ねた結果、温度が関係していることが確認されたそう。これも研究室が“貧乏”でエアコンがなかったことによるとか。若原さん自作の絵と俳句を交えたお話しを楽しく聞くことができました。



石橋さん
90歳
おめでとう

ボランティア・ニュース

- ◆編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、安田、永山)
- ◆発行日:2009年3月
- ◆連絡先
060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

ボランティアニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。
<http://www.museum.hokudai.ac.jp>